

山口古墳群

福ヶ迫古墳付近から南方に延びた支丘の東側斜面に密集する古墳群である（第27図参照）。一基が確認されているが、未掘墳一基を除けばすべて盗掘を受けたり、破壊されている。

2号墳は墳丘が削平されているが、石室は複室の横穴式石室である。玄室は長さ約二メートルで、幅は奥壁側で一・八メートルである。前室は長さ・幅ともに約一・二メートルである。埋土が厚く堆積するが、腰石は大形の石材を使用するようである。築造時期は六世紀後半と考えられる。

6号墳は直径約一メートル、高さ約三メートルの当古墳群中最大の円墳である。石室は複室横穴式石室である。

以上、豊津町内の確認された古墳について概要を述べたが、未調査のものがほとんどで、墳丘の規模や形態、更に石室の規模などは必ずしも正確なものではない。特に石室の構造については単室と表記したものが多く、しばしば盗掘による開口部から盛り土が大量に流入しているため、前室を確認しにくい場合が多い。また、前室が未発達で玄室や墓道部分との幅や高さに変化が少ない場合もあり、町内の古墳全体としては北垣古墳群のように単室に比べ複室構造の古墳のほうが多いとみられる。

第三節 豊津の古墳時代の遺跡（古墳以外の遺跡）

弥生時代から古墳時代にかけては、農業生産にかかわる単位集団は定住して生活するため、各集団の活動する領域がある程度決まっていたと考えられる。そして、大王の墓などの一部の例外的な土地利用を除くと、

各集団の領域内には、水田などの生産地を中心に、生産に適さない地域に集落が営まれ、更に生産地にも集落にも利用されない地域に墓地が設定されることが一般的である。このような観点に立つと、水田が広がり、古墳が多数分布する地域の周辺には必ず集落が存在することが予想される。豊津町内でも祓川流域の徳永・皆見地区には、左岸の沖積地は水田となっていたと考えられ、右岸の河岸段丘上には多数の古墳が分布することが確認されていた。そして、近年の道路建設や圃場整備事業に伴い、右岸段丘上で源左工門屋敷遺跡や皆見・カワラケ田遺跡など同時期の集落が発見された。古墳群が集中する節丸地区や甲塚地区などでも集落が分布する可能性は極めて高いと考えられる。

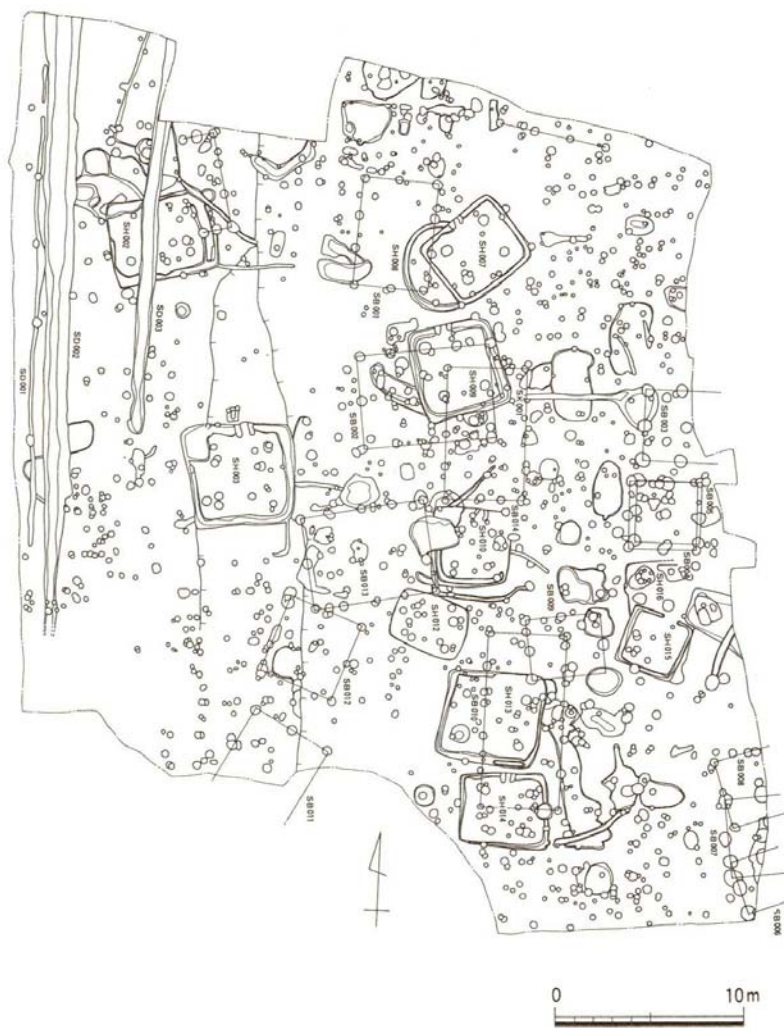
集落以外では、徳永地区で発見された初期須恵器を生産した窯跡は重要な遺跡である。また、二月谷祭祀遺跡なども注目される。

一 源左工門屋敷遺跡

当遺跡が所在する台地周辺には、北方約四〇〇メートルに古墳時代の五世紀代の須恵器の窯跡が発見された居屋敷遺跡、西方約一五〇メートルには六世紀代の群集墳が分布する徳永川ノ上遺跡などの遺跡が分布する。また、これら以外にも祓川から約三〇〇メートルの幅の範囲に、中小の円墳が点在している。

遺跡の概要

発掘調査区としてA・B・Cの各地区を設定した。A地区では、弥生時代の円形竪穴住居跡一棟・甕棺墓一基、古墳時代後期の方形竪穴住居跡一〇棟、古墳時代後期から中世にかけての掘立柱建物跡一四棟・溝二条などが確認され、全体としては古墳時代後期の集落跡が中心となる遺跡であ



第29図 源左工門屋敷遺跡A地区全体図

った(第29図)。一方、B・C地区では古墳時代後期の竪穴住居跡が一棟発見されたものの、それ以外は中世の地下式横穴五基・土壙墓一基・土壙五基・井戸三基・溝六条などであった。

遺構の詳細

発掘された古墳時代後期の竪穴住居跡は普遍的な形態のもので、平面形が四〜五メートル前後の方形をなし、床面には四本の柱が配置され、壁面の一辺には作り付けのカマドがあり、四周の壁面下には周溝をめぐらす(第5表参照)。A地区での住居跡の分布にはわずかに規則性がみられ、二・九メートルの等高線上に二棟平行し、六棟が二・八・五メートル前後に並び、他の二棟は二・八メートルの等高線上で切り合う。個別の住居跡の概要については第5表に示すので、ここでは代表的なA地区7号住居跡とB地区1号住居跡について紹介する。

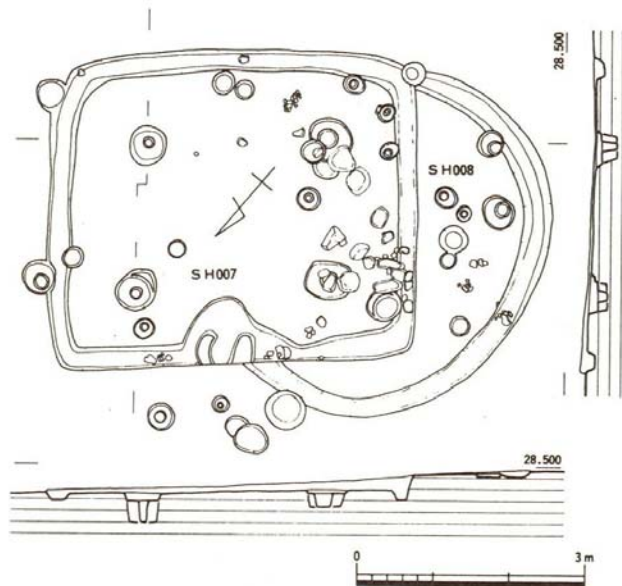
A地区7号住居跡(第30図)は調査区北部の標高二・八・二メートル前後に位置する方形竪穴住居跡で弥生中期の円形竪穴住居跡を切る。平面形はやや東西に長い方形をなし、南北四・一メートル、東西四・八メートルである。柱穴は径六〇センチメートルの円形ないし楕円形をなし、柱痕跡は径一六〜二六センチメートルである。カマドは北辺の壁面中央部にあり、周

第5表 源左工門屋敷遺跡の古墳時代竪穴住居跡一覧表

(単位:メートル)

住居跡番号	規模			構造			時期
	長さ	幅	深さ	平面形	カマドの有無	周溝の有無	
A-2号	4.4	5.7	0.20	やや長方形	不明	有	6C第Ⅲ四半期
A-3号	5.4	5.5	0.24	ほぼ正方形	有	有	6C第Ⅲ~Ⅳ四半期
A-7号	4.1	4.8	0.18	やや長方形	有	有	6C第Ⅲ~Ⅳ四半期
A-9号	5.0	4.6	0.28	ほぼ正方形	有	有	6C第Ⅲ~Ⅳ四半期
A-10号	4.3	4.1	0.15	ほぼ正方形	有	有	6C第Ⅲ四半期
A-12号	3.0	4.0	0.08	やや長方形	有	無	6C第Ⅳ四半期
A-13号	5.0	5.3	0.06	ほぼ正方形	不明	有	6C第Ⅳ~7C第Ⅰ四半期
A-14号	3.9	4.6	0.02	やや長方形	有	有	6C第Ⅳ四半期
A-15号	3.2	3.3	0.23	ほぼ正方形	無?	有	6C第Ⅲ~Ⅳ四半期
A-16号	不明	不明	0.05	方形	無?	無	不明
B-1号	4.7	4.5	0.07	ほぼ正方形	有	有	7C第Ⅰ四半期

第4章 古墳時代



第30図 源左工門屋敷遺跡A地区7号住居跡実測図



第31図 源左工門屋敷遺跡B地区1号住居跡

辺から須恵器・土師器などが出土している。また、周溝は四辺の壁面直下にめぐっており、幅三〇センチメートル前後である。出土遺物(第32図)のうち8は須恵器の杯身で、口縁部径一四・四メートル、器高は推定で三・三センチメートルである。10は土師器の甕で口縁部の径は推定一九・四センチメートルである。2は滑石製の紡錘車で、最大径四・五センチメートル、孔径〇・六五センチメートル、厚さ一・五五センチメートルで、断面形が台形をなす。

B地区1号住居跡(第31図)はB地区北側中央部にあり、規模は南北四・四五メートル、東西四・六五メートルである。東西にやや長いが、正方形に近い隅丸方形をしている。主柱穴は四本、柱穴間は東西に一・九四メートル、南北に二・〇四メートルである。溝は壁面直下にめぐり、幅〇・三〇メートルである。住居内北壁中央部にカマドを有するカマドは突出型で、周辺が熱のため赤く変色していた。出土遺物は住居内北西部やカマド内に須恵器・土師器が集中していた。

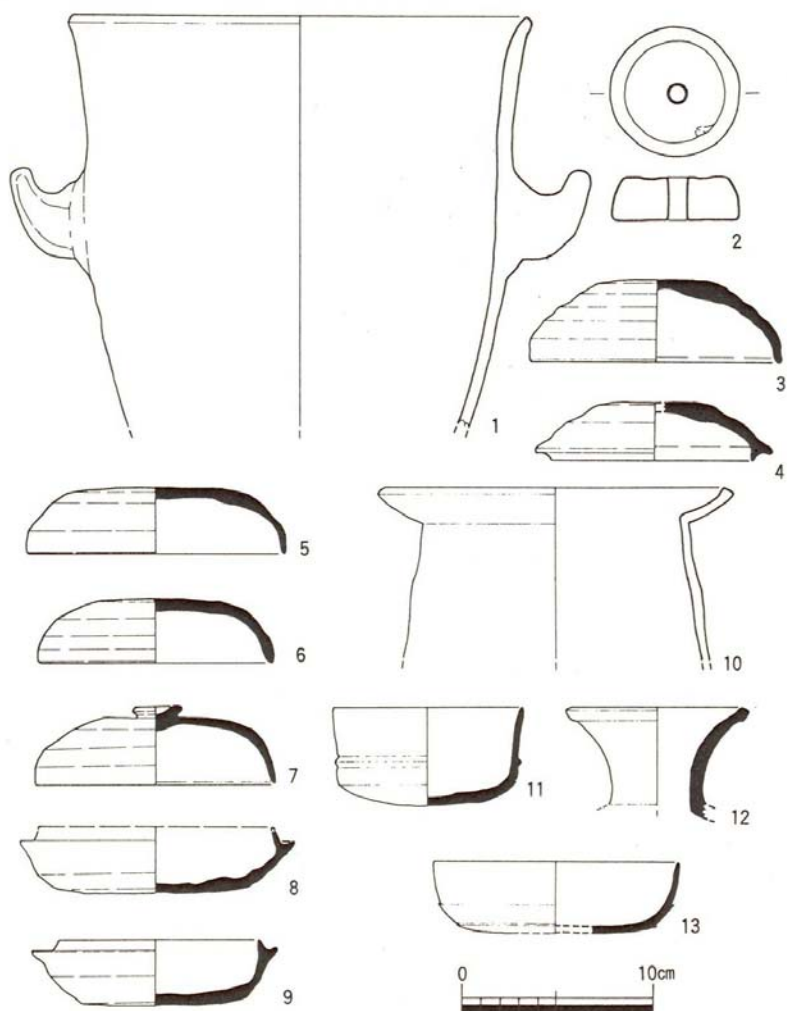
これらの方形竪穴住居跡のほかに、この時期の集落を構成していた施設としては掘立柱建物跡がある。

5号掘立柱建物跡は調査区東辺中央部に位置する方二間の総柱建物跡で、規模は長さ・幅ともに三・三メートルである。柱穴は円形ないし隅丸方形をなし、径七〇センチメートルとやや大形であるが、柱本体は径二〇センチメートル前後と推定される。遺物は柱掘方から六世紀後半代の須恵器と数点の土師器が出土している。

遺跡の性格

源左エ門屋敷遺跡の古墳時代の遺構としては、一一棟の方形竪穴住居跡のほかに、掘立柱建物跡や溝の一部も含まれる。これらの遺構は時期的には六世紀後半から七世紀初頭のものである。竪穴住居跡についてみると、平面形はほぼ正方形のものからやや長方形をなすものまで若干の相違はあるが、大部分がカマドと周溝を持ち、主軸もN―約40―WからN―約30―Eの範囲にあり、更に平面規模

第4章 古墳時代



第32図 源左工門屋敷遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図

1 瓶、2 紡錘車、3～7 杯蓋、8・9 杯身、10 甕、11 埴
12 長頸壺、13 高杯

も一辺が三・二メートルから五・五メートル程度で、特に大型のものはみられない。遺物の面でも碧玉製管玉が一点出土したほかは、特に顕著な鉄製品などの遺物を出土した住居跡もなかった。集落全体はA地区が所在する尾根の調査区外の南北に更に広がるものと予想される。竪穴住居跡の分布状況からみて、短期間ではあるがかなり大規模な集団が存在したと考えられる。

二 些見遺跡・カワラケ田遺跡

些見遺跡・カワラケ田遺跡はともに、祓川によって開析された洪積台地の中流右岸の段丘上にあり、祓川からの距離は二〇〇メートル程度と近い。遺跡の標高は、三二一〜三六六メートルである。

両遺跡は県道節丸・新田原停車場線を挟んで近接し、ともに遺構の時期および性格が類似していることから、同一の遺跡を構成するものと考えられる。両遺跡の時代は古墳時代後期から奈良時代にかけてが中心であり、同時期の周辺遺跡としては、徳永川ノ上遺跡の古墳群、源左工門屋敷遺跡の竪穴住居跡群がある。両遺跡から源左工門屋敷遺跡までは直線距離で約九〇〇メートルである。なお、両遺跡の所在地は、些見遺跡が大字些見字峰・カワラケ田、カワラケ田遺跡が大字些見字カワラケ田である。

調査経過と 遺跡の概要 調査対象地は水田および畑となっていたが、国道一〇号椎田バイパス予定地となり、昭和六

本調査は、些見遺跡が昭和六十二年八月から昭和六十二年十二月までで、調査面積が約九〇〇〇平方メートルであった。カワラケ田遺跡は昭和六十二年十一月から昭和六十三年一月までで、調査面積は約三〇〇〇平方